

Listen To My Story

by threelines

— Someday, Somewhere



【反省】



そんな言葉、要らないとずっと思ってきたはずなのに
気がつくと
なぜ僕は、反省ばかりしてるのだろう？
君を一目みた
その日からずっと…

【冬の光】



窓ぎわのベッドの陽だまりに宿る
冬の光が切ないのは
そこにあるはずの
君の温もりを知っているから
同じ空の下にいても
違う朝を迎えるさみしさを
知ってしまったから

【追憶】



「ねえ？」
「うん？」
「覚えてる？」
「うん？」
「だから・・・」
「忘れた」
「ウソ？」
「嘘。」
「どっちだよ」
「覚えてる」
「よかった」
「うん、私も」

【Home】



負け惜しみでもなんでも無いが
丸の内のオフィス街を颯爽と歩くことに
憧れたことなどない。
小汚いこの街で
曇り空の下
今日も仕事に向かう
ちっぽけな夢だけれど
胸にある誇りを
あざ笑う人はいないから
僕はまだしばらく
この街で生きてゆく

【朝が来るから】



おはようの数だけ
神様から受け取るシナリオを
さて今日はどう料理しようか。
君を勝手にキャストイングして
幸せを願う僕を
そっと許して
できることなら
そっと微笑んで

【北風と太陽】



手をつなぎ歩ける
晴れの日が好きだった僕も
本当は不安でいっぱい
ぎゅっとすると
強く握り返す君を
ただ信じることしかできなかった
いま、隣にいて
君は北風に凍えてるけど
抱きしめてもいいかい
ベッドに潜り込み、君の温もりを
感じていいかい
冬の日
僕らの想いは通う。
春が来て
太陽の下
それぞれの道に行く寂しさを
希望と名付け
歩むまで

【海】



人のシアワセが
自分の幸せであれば
もっと楽になれるのに
人のカナシミが
自分の哀しみであれば
僕は孤独じゃないのに
いつから僕は
自分のことばかり
かわいくなったのか
水平線を眺め
潮騒に身を任せ
鼻腔をくすぐる磯の匂いに深呼吸し
恍惚と
海に抱かれる僕はいま
母を想う小さな子供のように
まどろんでゆく

【帰路にて】



家に帰ろう
いつもの道を辿って
左手には買い物袋
右手は大きさに振って
まだ僅かに宿る
あの人の左手の温もりを
夕空に放つように
泣いてもいいから
ほら
世界中の想いに彩られたあの空にも
もうすぐ夜の帳が降りて
全てをさらっていく

【昼下がりのカフェで】



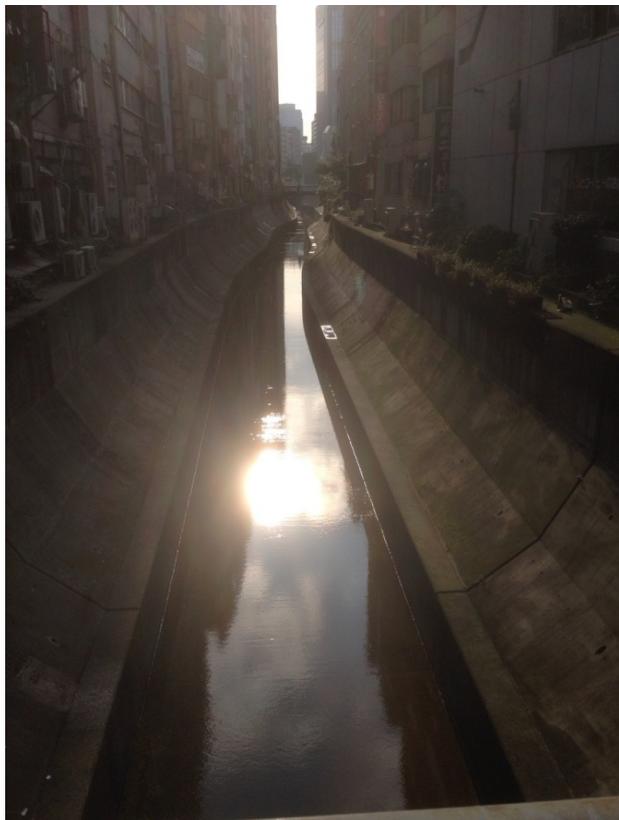
ビジネスマンの集まる
午後の喫茶店に溢れる自由
生きているから働くのか
働くことが生きることなのか
そのコタエなんて
今の僕にはまだわからないけれど
きっこうして
日々の喧騒の中に身をおいたり
離れたり
そんなのを繰り返して
昼下がり
こんな風に
振り返ることができるなら
想いは遠く遠くまで
飛んでいけるから
どんなに忙殺されようと
僕は自由に生きている

【おとなり】



小さな頃は
隣に座った女の子に
恋する事が多かった
僕がはしゃぐものだから
隣の子も好意を寄せてくれたりで
席替えになると
寂しかったり
あるいは反面
ワクワクだったり
今、隣に座る子も持たず
はしゃぐことも少なくなった僕は
フルーツバスケットで負けた子供みたいに
途方にくれることもあるけど
きっとそれは
自分の居場所をまだ探してるから
それは生涯の伴侶というやつか
終の住処というやつか
あるいは仕事か
自分の足で歩かなければならないことに
時々疲れ
時々泣きたくなることもあるけど
また誰かと笑いあえるなら
あの日の教室を思い出して
もう少し
頑張ってみようか

【世界の片隅から】



都会の小さな水路を眺め
胸に去来する
無力、無力、無力。
どんなに叫んでも
それがどんなに深刻でも
誰もが見て見ぬ振りで
自分の身にふりかかるまでは
それは他人の世界
そんなの分かってるけど、
この想いを
この流れにうかべ
いつか誰かのもとに届いたら
願う先に
コタエがなくても
こんなふうに
世界の片隅から
世界の片隅へ
巡り巡り
他の誰かの涙に辿り着くなら
どこか心強く
どこか救われる気がする。

【つながり】



哀しいことを書いてみても
嬉しいコタエがかえってくる
孤独だと感じた次の瞬間に
励まされる
たしかに
煩わしい人間関係も中にはあるけど
僕と皆んなの気持ちの温度差に
当惑することもあるけれど
つながることで
もたらされる温度だけが
僕を変えてくれる
大事にしなきゃって
バスの中でふと思った

【鉄板焼き物語】



最後に家族で食卓を囲んだのは
いつだったか
あの日
僕は確かに泣いていた
じゅうじゅうと
鉄板の上で
こがね色に変わる
ジャガイモ
ニンジン
キャベツ
豚肉
ソーセージ
無意識に視界に収めた
ありふれた日常が
少しずつ滲んでゆく
「ほら、焦げるから」
オブラートに包まれたような記憶が
鉄板焼き器に重なる
悲しかったのではない
幸せが目の前に
まだ残っていることが
たまらなく嬉しかった
10年を経て僕はまた
鉄板焼きの語る物語に
耳を澄ます
じゅうじゅうと
いつまでも胸に残る
満たされた時間

【迷子】



身を切るような寒さに
俯きながら歩く
冬がれた並木道
「今年もまた冬将軍がやってきました」
そういえば今朝
天気予報の美人キャスターが繰り返した
上の空のテレビジョン
古今東西
西高東低
おとし買った
色褪せた茶色いコートは
まだ着れて
未来永劫繰り返す
春夏秋冬を受け入れながら
古びた映写機が映すような
眼前にある景色にデジャヴすれば
胸に巡るは
凍れる音楽
……一体全体
……僕らは今
どこを歩いているというのか？
少なくともほら
あの建物に
逃げ込めば
フェイドアウトする
それは……
ネバーエンディングストーリー？

【夜のバスのララバイ】



夜のネオン街を抜けたバスが今
住宅地にさしかかる
喧騒はしずけさに置き換わり
やがて鈍い疲れが
眠りへと僕を誘う
今日あったこと
よかったんだよね
何も問題ないよね
胸に抱くのは
張り詰めた気持ちの
反動で
誰かに慰めを
乞うてるよう
だいじょうぶ
今日も一日
お疲れ様
家に帰って
全てを忘れなさい
まどろみに抱かれ
暗がりに包まれ
きっと
明日はいい日だと
信じる僕に
罪はない
もうすぐこのバスも
僕を降ろし
皆の帰りを
見届けたあと
車庫に入るだろう
だから
おやすみ

【ディア サンタ】



ねえサンタ
話が、あるんだ
あれは小3のクリスマス会
場所はどこかの公民館
プレゼント交換で
100円のガチャガチャだけ用意した僕は
誰に渡るか
ハラハラしながら眺めてた
大好きなあの子に
わたってしまったら
どう言い訳するか
ずっと考えてた
でも
僕のその
後悔の塊は
話したこともない
1年生にわたり
満面の笑みを浮かべていた
その子の表情は
みるみる曇り
泣いてくれれば
少しは僕も楽だった
ほら泣いてよ
我慢しないで
謝るから
別のプレゼント
今度あげるよ
ねえサンタ、
……大人になったあの子にいま
最高のプレゼントをと願うのは
僕のエゴなの？

【星空】



満天の星空に
手を伸ばすように
あれもこれもやりたいなんて
身分不相応に思うけど
いつも中途半端に終わって
それなら何か自分にあったもの
そんなのが欲しいなんて
満天の星空を眺めて
今度は
途方に暮れる
何万光年先にある
強い光に魅せられてたとして
必死に手を伸ばす僕らは
いったい何者か？
僕らの宇宙船地球号では
数え切れないほどの夢たちが
日々生まれ
やがて終える
それでも僕らが生きるのはきっと
その場所で輝けば
周りの人の心に
星が生まれるから

【気になる木】



都会の一角に
こんな木があつて
ふと、歩を休める
そんな朝
そこだけ切り取られた絵のような
奇妙な感覚はまるで
タイムスリップのよう
僕らの街に
色んな時代が同居していたら
素敵だなと思う
こんな場所なら
迷子になっても
構わない
四角いビルに囲まれた
職場に行く前に
しばしの深呼吸

【目が覚めて】



ふと目が覚め
ふらりと外出した
未明の街かど
不思議だね
冷たい空気に包まれつつも
セーターにこもる
その温度は
まだ僕を温めている
夢をみた
新しい夢を
まだ見ぬ君が
微笑んで
手を繋いで
朝日に消える
肌に残る
夢の形跡は
やがて夜が白む頃には
孤独に置き換わるだろう
それまで僕は
ただその感触を
咀嚼し楽しむ
そんな未明の街かど

【喪失】



彼女のことが嫌いだった
いたずらっぽいやつで
いつも
見透かしたようなことをいう
揚げ足取りは日常茶飯事
弱みにつけ込むのは
天才レベル
でも
僕の最初で最後の
ささやかな抵抗が
彼女を傷つけた
部署異動で
転勤になる彼女の
お別れ会を
すっぽかす
人づてにきけば
彼女は..
...泣いていた
言葉と裏腹な気持ち
気持ちと裏腹な言葉
そんなのを体当たりで
ぶつけてくるほど
求めてきた彼女は
いまだれに
同じことをしているのか
また彼女が
目の前に現れたなら
もう見逃さない
そう強く思うけど
強く思うほどに
遠ざかる君は
やはり意地悪なのか？

【僕の知らない朝】



いつもより
二時間早い朝
商用で
始発電車の待つ駅へ
まだ未明の空には
満月がいて
気づいたか
とばかりに
こちらをみてる
西へ向かう僕は
否が応でも
月と対峙し歩く
こんな朝は
ミステリアスだけど
子供の頃にみた
絵本に似ている
どこか心地よい
僕の知らないところで
世界が動いている
満月が支配する
そんな朝は
胸騒ぎと静謐が同居する
僕の知らなかった世界
こんな発見が
まだまだある
若さに密かに感謝する
寝静まる
朝の道のり

【原風景】



首都圏からの
ショートトリップ
たどり着いた先は
人家もまばらな
ルーラルエリア
吸い込む空気は透明で
吐き出す息は白く
ここにきて
冬は本格化した模様
歩道沿いの川べりに
ひかりがさして
いつかみた景色は
……30年前の
若き日の
母との思い出
古里というやつを
持たない僕だけど
目を閉じれば
愛おしさと共に甦るのは
今より何十センチ低い景色と
……繋ぐ手の温もりで
ああ僕は
こんな遠くまで来た

【色】



むかし、むかしの話
あるところに
僕とあなたがいて
穏やかな毎日を送ってました
僕が街に仕事に行くというと
あなたは家で洗濯をされると言い
そんな毎日が暫く
つづきました
ある日
僕は尋ねました
（どんな色が好き？）
あなたは答えました
（青と…それから橙かな）
僕は誕生日に
青と橙をあしらった
ピアスを買いました
あなた大変喜んでくれました
しかし
別れの日が訪れました
あなたはピアスだけ残し
静かにいなくなりました
数年後
仕事帰りに
夕焼けを見てふと気づきました
それは何よりも大切なことに思えました
僕がいなくなる時
僕が帰るとき
あなたはいつも
空をみていたのですね

【蒼いよ】



空が蒼いよ
風が冷たいよ
日差しが眩しいよ
なんだか、哀しいよ
あの日君とみた景色が
ただそこにあるだけなのに
時を移動することができない
もどかしさに
諦観を覚え
いつも
いつも
僕はお利口さんで
何よりも
切ないのは
君が僕の前に
現れない理由がきっと
君が
他の誰かと
幸せに暮らしているからだと
わかるから
同じ空の下にいても
違う気持ちでいると
わかるから

【世界の終わり】



最後の日
もしそんな日があるとしたら
それは
こんな風に
穏やかな光に包まれた
白い一日だと思う
最果ての地
もしそんな所があるとしたら
それは美しい海を臨む
坂の多い白壁の街だと思う
永遠の命を恐れ
宇宙を知ろうとする僕らは
無限を願うようで
有限を欲してるけど
それは矛盾でも何でもなく
幸せに向かって歩いていると
信じたいからだと思う

【あこがれ】



透き通った音楽を聴くような
あの子の話
澄み切った空をみあげるような
あの子の仕草
もし触れたなら
崩れてしまう
ガラス細工のような
そのすべてを
僕は遠くから
ただ眺め
眺め
胸を痛める
そんなの
自己満足だし
自分の心の投影でしかない
そんなのわかってるけど
キズつくのが怖いのかい？
夢から覚めたくないのかい？
ねえ？
..坊や？
そうだよ
悪い？
北に赤ずきんちゃんあれば
気をつけてを言い
南に仲間はずれあれば
ライ麦畑で捕まえてあげたいと願
20歳の頃から引きずってきたこの
孤独と未熟は
'あこがれ'
という名の
僕の原点なのですから

【上を向いて歩こう】



ほら
衰しい気持ちに押し潰されそうでも
こうべをたれて
歩いてばかりはられない
沢山悩んだら
あとは上をむいて
こんな光景が
君を待っている
この国は
今日も平和に包まれているのだから

【どんより空経由、職場ゆき】



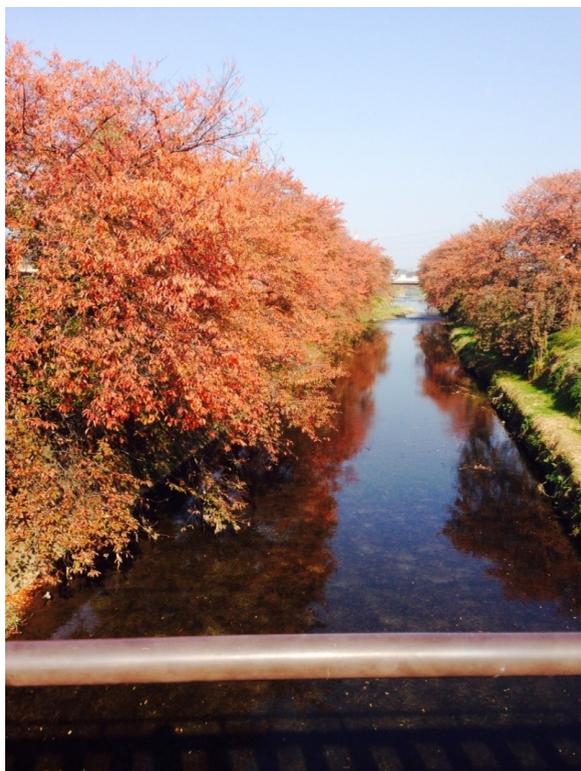
目が覚めて
ひとり
窓の外は
曇り空
寒い
ストーブのスイッチを入れ
風呂をたく
玄関のドアを開け
深呼吸
朝露に少し
慰められ
バス停迄のみちのり
白い息
犬の散歩
シャッターの降りた商店街
今日のバスも
少し遅刻
黙り込む
乗客
職場のドアを開ければ
『おはようございます！』
人いきれに
少しだけ温まるけど
ねえ一体
この繰り返しを経由して
僕は幸せになれるの？
……そこまで想像して
ベッドの傍の窓を開けると
携帯にメッセージ
心に灯る
よろこびと
小さな勇気
そうか、君がいるだけで
こんなにも違うんだね

【革命】



無地の壁と
人いきれに囲まれ
カタカタと
オフィスに響く
タイプ音
鳴り止まない電話
と会話のない対話
時間に追われ
作られた自己に自己満足し
ふと息を着くと
頭にあるのは
キーワードだけの
ノーアイデアで
いやいや、
いまはそんなことを
思い悩む暇はないと
仕事に戻る
産業革命
IT革命
飽くことのない
スピード社会への追求を
流れに身を任せるごとく
受容し
『世の中は便利になったね』
って、ほんとかよ……
ビッグバンドは
四半世紀以上も前に
歌っていた
”本当にその革命は
必要なのかい？”
それさえ今は
キレイゴトなのか？

【発信】



郊外なる河のほとり
秋深く、遊子かなしむ
こうして
いつまでも変わらないものを
両腕いっぱい抱え
そのまま
君に贈ればいいのに
掬い上げようと
何度も
何度も
繰り返し
繰り返し
胸に抱いても
こぼれてしまう
もどかしくて
不器用な
この気持ちを
愛と呼んでくれる人は
いまどこにいるのだろう

【クエスチョン】



『正義』とは何ですか？

ルールですか

マナーですか

悪をこらしめることですか

誰がつくったのですか

つくった人は正義なのですか

それは

自分を守るものですか

他人を守るものですか

その正義に

優しさはありますか

思慮はありますか

人を傷つけていませんか

正義は勝ちますので

取り扱いには十分にお気をつけ下さい

【マスカレード】



今宵は仮面舞踏会
日常のしがらみから
あるいは自分自身から
自由になり
なりたい自分のマスクを作ろう
迷いは無用
悩むだけ損
鮮やかなブルーが
今日のわたしの
フィーリング
キラキラとした装飾を施し
..ほんとうに
これ
私なの？
いえいえそのくらいが丁度いいんです
今宵は仮面舞踏会
あこがれのあの人も
これなら振り向いてくれるかな
だけど..
結局
自分が楽なのは
やっぱり自分でいたいから
哀しいくらい
愛着のある自分だから

【インディアンサマー】



小春日和の公園で
ネコをながめながら
なんだかな
ネコたちといえば
とっくにそんなのには
慣れっこのようで
冬の陽だまりに
丸くなり
ただひたすらに
眠りをむさぼる
それもなんだか
羨ましくもなんともなく
結局怠け癖のある僕にも
なんだか刺激が必要で
それは仕事だったり
読書や映画だったり
あるいは
ちょっとしたお散歩だったり
もしくは恋であったり
こんな柔らかで
静かで
優しい日になると
そんな願望が
あぶり出しのように
次々と浮かび上がるものだから
人の心は縛れないと思うのです

【夢を乗せて】



線路をすべる
休日の
がらんどうの列車
光と影が
車内で交錯し
描き出されるプリズム
『本日の電車は』
ガタン、ゴトン
『自由経由の幸福方面行き』
ガタン、ゴトン
『終点は、ありません』
乗り合わせた乗客たちは
思い思いの幸せを列車に託し
やがて窓の外に目的地を見つける
次々と人が降りて
取り残され
それでもなお
下車駅が見つからなくても
焦ることはないんだよ
その夢を成し遂げるための時間は
まだ残っていると
君はちゃんと
わかってるはずだから

【花の名】



あの日、あなたが
心待ちにしていた
花の名を覚えている
ペチュニアちゃんに
サフィニアちゃん
春になればベランダいっぱい
咲き乱れるんだから
ようやく膨らみ始めた蕾に
カウントダウン
期待を込めた
冬の終わりに
しかし僕らは離れていった
取り残された花だけが
順調に
でもどこか残念そうに
そのたたずまいを
整え
僕は気づきはじめてのだ
まだ胸に残る
この想いを
当時は知らなかった
その花の花言葉と共に
いま
あなたに贈ろう
『あなたと一緒に心が和らぐ』
そんな日々でした

【シルエット】



夜の街を歩きながら
闇に包まれるのは
依然曖昧な
自分のシルエット
僕はいま
どこにいるのか？
知るのがこわいくせに
未熟な自分の
輪郭をどこか
知ろうともがく自分がいる
光がさすまでは
不可能だとわかってるから
諦めるけど
光が何なのかさえわからない僕は
がむしゃらに
目の前のことをこなすしかなくて
例えばもし
僕が誰かの光になれるなら
喜んでそうするけど
はたして
それを
望む人はいるのか
例えば
僕が誰かの光になれたとして
僕自身は輝けるのか
そう
月明かりはいま
何よりも遠い
まだ僕は
夜に浮かぶ
淡い月夜のシルエット

【涙】



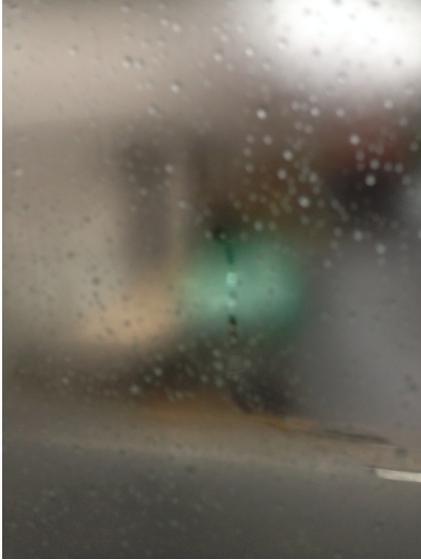
泣きたくて
泣けなくて
涙で洗い流せない想いは
石ころみたいに
蓄積してゆくけれど
それならいま
下ろすことのできない
そんな石ころを
ひとつ
ひとつ
磨き上げて
輝く宝石にかえてあげる
そう
小さい頃に
信じていた
錬金術のように
そんなことは
できないわ
私は私
あなたはあなた
今、たまたまここで交わった
二つの物語
ここから先は
別の道
いえいえ
結ばれた糸の
心強さが
君の物語のすべてを
肯定するの
だから……
どんなに悲しいことも
僕に伝えて
僕はここにいる
いつしか流れる涙の
その最後の一粒は
ぼくが見届けるから

【時効成立】



君との待ち合わせ場所
下北沢のジャズ喫茶
桜木町の改札口
そこにいけば
会えるかもしれない場所
横たわる歳月を越え
僕らが確かにそこにいて
おもいを通わせたと
証明してくれる
そんな場所が
ひとつ
また一つと
取り壊され
消えてゆく
まるでそれは
時が人を待たないように
残酷で容赦無く
洪水のように
流し
流し
跡形もなく
僕らの恋にアリバイは
ございませんが
神様
もう誰も
その時僕らがどこにいたか
何をしたかさえ
聞かないのですか

【雨】



雨やだね
君は何気無く言い
ほんとだね
僕も軽く相づちをうつけど
本当はそうでもないんだ
出会ったあの日を覚えてる
寂れた校舎は暗く
講義室に現れた君は
髪の毛を濡らし
急な夕立から
避難してきた
僕は折しも
窓の外を眺めながら
遠雷に少し怯えてた
誰もいなかったと思う
まだ洗いたての
水色のハンカチを貸すと
君はありがとうと言って
僕はユアウェルカムと言って
そして
ふたりで笑った
雨がくる度に
振り出しにもどる
それはステキなことだと思うけど
君は違うみたい
ほら今
僕が聴いてるカレンの唄声が
イエスタデーワンズモアだなんて
照れくさくて
言えないんでいるんだよ

【朝焼け】



だからさあ、あいつときたらもう口も聞いてくれねえんだよ。確かに俺も悪いさ。でもあんなすました顔で口を一文字に結んでギツとこっちをにらんでさ。まるで自分は悪くありませんて。元はと言えばあいつの過ち、じゃねえか。俺はさ、ほんとうに惚れてた。そうじゃなければこんなグチグチも言わねえさ。嫉妬もしねえ。ここだけの話だぞ。その洋介って男？加奈と付き合ってたんだ。俺たち、夫婦で騙されてったわけ。似たものどうしなのかな。悔しいよ。情けねえよ。でもな、あいつがそっちがいいって言うなら俺は身を引く。それしかないだろ？そうそう、ところで今朝は朝焼けが綺麗だな。明日は雨になりそうだ。ちょうどいい。

【タイムスリップ】



東京の冬は冷たいから
手袋、マフラー、
そうそう
お弁当はちゃんと持った？
ノイズだと思ってた
おせっかいが
大切なものだと気づくのが
いつもワンテンポ遅い
トントントンと
目が覚めると聞こえた
まな板を叩く音と
味噌汁の匂い
ふすまの向こうにある気配
暗闇の隣にある静かな灯り
抜け出したいと思ってきた日常が
記憶の中で
憧れに変わる
手放したらいけないものを
ないがしろにしてきた僕は
自分のための自分
他人のための自分
使い分けるのが下手で
めんどくさがりで
そのくせ自尊心は人一倍だから
本当は誰かに
隣にいて欲しいんだ
今度は
正面から向き合って

【ココアの味】



夕暮れのカフェでの
クライマックス
ラストでの
大どんでん返し
涙必至の
感動の結末
案の定
ココアに
ひとしずくの涙が落ちて
書を閉じた僕は
密かに
その味を想像する
甘いのか
それとも
すっぱいのか
そんなこと、どうでもいいじゃない？
隣の席で痴話げんかがはじまり
何故か
微妙に羨ましい
10年で
人のしない苦勞をした
人の考えないことを考えた
それでいいとおもってたけど
人の苦勞は知らない
そんな逆説を抱え
きっとすっぱいに違いない
ココアをそっと口に含むと
思いのほか甘くて
少しがっかりする
僕の人生なんて
まだまだなんだな

【フィクション】



時までもが駆け足をしているような
師走の朝は
朝焼けを頼りに
いつも自分探しに腐心する
僕がいるわからない
身を切るような冷気に
麻酔でも射たれたように
見失うもの
それが何かさえ
わからなくなる
自分なんて
実態の無い物かもしれないと
唯物論に話を咲かせるのも
また一興
だけどそれじゃあ
君に申し訳ないと思いつつ
僕は虚構を紡ぐのです
たとえいつか
フェードアウトする定めの
小さなストーリーでも
燃えて無くなる
僕と君しか知らないエピソードでも
それを交わし続けることに
意味があると思うから
僕はそれを
探し続け
生きているのです

【まだ見ぬ君へ】



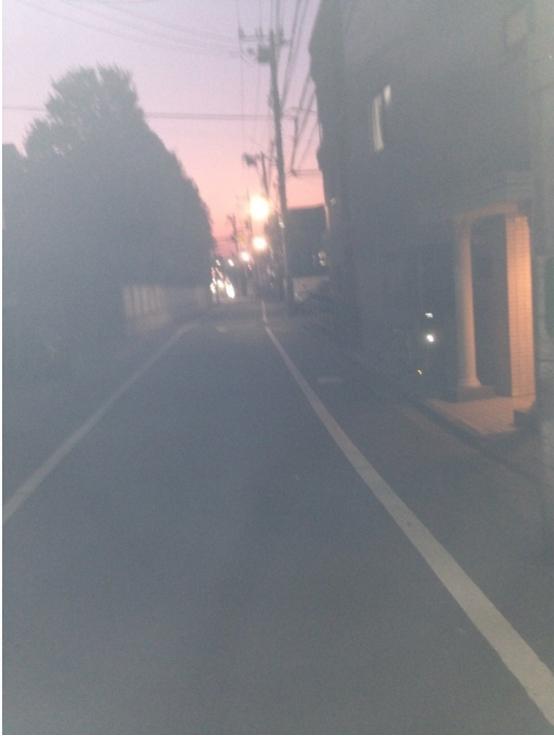
何の変哲もない
静かな街が
夜の衣を纏うに従い
変身を遂げる
イルミネーションに飾られ
思い思いの想いが
街に溢れはじめ
あの人に何を買おうかしら
あの人にお似合いの
プレゼントは？
いつものメロディー
活気は最高潮を迎え
もうすぐ楽しいクリスマス
だけど..
ショーウィンドウにひとり映る
君はいま
夜に浮かび上がる
一輪の花
誰にも会えない
一人きりのイブ
街の活気に
焦る心も敗北感も
やり過ごして
気高く咲いていてくれよ
生き急いで
枯れてしまうのは
とても哀しいことだから
だって..
いつか君を迎えに行くのは
僕かもしれない
..勝手かな？

【あの日に還る】



クリスマスケーキいかがですか
輝く街並みに
夜の喧騒
艶っぽい外れの
休憩所
年末最終大売出し
今日は特別な日だから..
ハッとしたのは
ふいに
切なく遠い
君の声が混じったから
確かなこと
君がいたということ
触れ合う肌があったこと
つなぐ掌があったこと
美味しいねって言うこと
綺麗だねって言うこと
寂しいって言うこと
幸せだねって言うこと
ずっと一緒だと信じること
愛していたこと
それから..
思い出を語る人さえ
今はいないということ

【濡れる】



心が濡れるくらいの
いい本を読み終えた時の
溢れる気持ちやため息が出るくらいの
素敵な映画を観た後の
妙な人恋しさみたいに
手を延ばせば
いつもとなりにあるような感動を
抱きつつ生きていければ
人はいつも
希望や願望とは裏腹に
雨に打たれたり
日に焼かれたりしながら
一生懸命生きるしかない
不器用な生き物だから
そんな何かはと
考えるとき
いつも初めに思い浮かべるのが
どうしようもなく
途切れ途切れの
君の横顔なのは
君の笑顔なのは
俯く君の遠い哀しみなのは
君がくれた
沢山の涙に
ぼくがまだ
濡れているからなのですか？

【告白】



何かいい事ないかなんて
いつも思ってる
希望に満ちた朝は
軽い絶望で幕を閉じ
夜へと取束する
これじゃまるで
ループに迷いこんだみたいな
繰り返して
そんなのやだなど
思いつつも
何を求めればいいのかさえ
わからず
なんだかバカみたい
夢を追いかけて
毎日駆けずり回り
夢の中で生きるのも悪くはないが
何かをこの手に掴む
そんな瞬間はいつになるのか？
初めてビートルズを聴いた時のような
初めて映画を観て泣いた時のような
初めて好きな人と手を繋いだ時のような
些細なことでもいい
何か欲しいと願うのは
ねえ、贅沢なことなのですか？

【休日の夢】



休日の喫茶店で
ダラダラとうたた寝をしながら
ライオンの夢をみてる
小さな幸福が
とてつもなく
愛おしく感じる
そんな昼下がり
カランコロンと音を立てて
入り口のドアが開き
君が
お待たせと言って
そうやって
入ってきて
僕の隣に座り
僕はライオンの夢の話をして
君は
何よそれなんて
微笑んで
僕はなんだか
嬉しくなって
さて、今日はどこに行こうかと
コーヒーカップを傾け
君をみると
いなくて
びっくりして
手元がくるい
コーヒーがこぼれ
ハッとすると
夕闇に包まれ始めた
殺風景な部屋で
僕は目覚めるのだ

【光と影】



むかし
僕らの世界は
くすんだ光で満たされ
先の先に何があるかなんて
ちっとも見えやしなかった
光の先にある影
影の先にある光
そのコントラストが
僕らを一喜一憂させたけど
隣には大事な人がいて
日常は
温かに
滑らかに
流れていたのを覚えてる
不安はあったけど
この世界に影と同じ量の光が宿るように
同じだけの期待があって
蜃気楼みたいに
遠くで輝いていた
今
全てが詳らかにされる
このクリアな世界で
泣く人も
笑う人も
どこか寂しいのはきっと
僕らが要らぬことまで
知りすぎてしまったからではないか？
それなら僕は
真実よりも何よりも
君の心を
見守っていきたいと思うよ

【主観と客観】



いつからか僕は
無鉄砲で
あろうことか頑固でさえいて
築き上げたものを
一瞬でダメにすることも
厭わずにいて
損ばかりしている
自分の力を出し切れず
もがいて
空回りして
そんな自分がわかるから
なおさら情けなく
開き直りか？
自分を客観的にみろ
なんて言う人もいる
だけど思う
自分を客観的にみること「しか」できなくなったら
おしまいだよって
独りよがり？
なんとでも言うがいいさ
蓄積される経験が
知らないうちに
新たな自分を
作り出す
だから
内観し自分で確かめることもせず
ただ他人の評価だけにおもねる
そんな臆病者にだけは
なりたくないんだ

【決断】



次はどの駅で降りよう
流転とも言える生き方に
愛着を抱き
色んな景色を
やり過ごしてきたけど
果てし無く続く線路にだって
終着駅はあるから
どこまでも
どんなところにでも
連れて行ってくれると思うのは
もしかしたら
僕の錯覚なのかもしれない
いつかは決意を固めて
置かれた場所で
輝く
住めば都
それは
哀しいことのように
あるいは
退屈なことのように
新鮮な気持ちへと
誘うきっかけなのかもしれない
そこには
たとえ地味でも
心を満たす
夢にもみないような
景色があるのかもしれないから
車窓からの景色を
ずっと眺めているよりは
試しにちょっと
降りてみないか？

【あけましておめでとう】



今まで会った人
どこかで絡んでる人
昔けんかして別れた友達、彼女
今はどこにいるかさえわからない知己
随分とご無沙汰してる親戚、家族
職場で共に働いていた人
全てを受け止めた上で
ありがとうとか
ごめんねとか
言い合って
新たな気持ちで
あけましておめでとう
って言えたらいいのに
移ろう人の心も
一つのを分かち合う時
生まれ変わると
信じることができたなら
それって
最高でしょ？
そんな単純じゃないし
許せないことだってあるし
相手の気持ちだってあるし
だけど
この季節がいつも
皆にとって
そんなきっかけになることを
願います

【これから】



疲れていたんだ
言い訳でも何でもなく
ねえ、君は信じてくれるかい？
職を転々とし
心を閉ざし
理不尽に全力で抗った時期
何かを探しつつ
探しあてたことは僅かだし
何かを問いかけて
与えられた答えも僅かだけど
僕は僕なりに成長したつもりなんだ
義務教育を終えた後の
オトナなんて
無責任以外のなんでもないけど
気がつけば
自分自身がオトナに分類されているなんて
なんだか滑稽だから
もう
いたずらに人を責めることはしないよ
オトナとかコドモとか
運命とか宿命とか
才能とか
そんなのは相対化して
僕は世界の片隅で
自分のために
成長するんだ

【カラカラ】



徹夜明けの始発電車に揺られながら
ぼんやり
カラカラと走馬灯のように巡るのは
連日の強行軍

窓の外は暗く
思考だけが徐々に熱を帯び始めるけど
何か潤いのあるものを
何か胸に溢れるものを

そんな想いまでもが
カラカラと
空回りしてるみたい

むかしあの子が言っていた
笑顔でサヨナラってやつをして
何か新しい刺激をと思うけど

どうやら
期待薄なようで
ふいに訪れた眠気に
僕は眠りを貪りはじめる

【最後のフェアウェル】



ひとつの命が
青空に迎えられるように
煙になり
天に昇ってゆく
凍れる冬の空気を貫く
鋭い日差しをみつめると
目の玉が痛むけど
今は泣きたくないから
じっと見つめていたいと思う

おばあちゃん
あなたは
もう本当に
ここにはいないのですね
ずっと会ってなかったから
あなたの声も
あなたの優しく寛大な眼差しも
忘れかけてたけど
いまこうやって
思い出たちが
脈絡もなく
胸に去来するのは
皮肉なのでしょうか
それともあなたがそうさせているのでしょうか
抱きしめてくれた温もりは
間違いなく僕の中にあり
巡り
巡り
僕を生かしてくれていますよ
あなたの愛情が
自分を信じる勇気になって
僕の中で
巡り続けるのです

さて
お別れに
僕は胸の中で
合掌するかわりに
精一杯に手を振ります
あなたがお別れの時
いつもそうしてくれたように
見えなくなるまで
いつまでもそうしてくれたように

【忘れない】



新しい朝に降り注ぐ
冬の寂光はまるで
孤独の証のように
まっすぐに哀しいけれど
あなたなら
それを優しさと呼ぶのでしょうかね

いつだってあなたは
無垢な想いで
この世界に名前をつけて
それは時に残酷なほど
共感できてしまうから

僕はきっと
嫉妬してたのかしら
あなたの流す涙がいつも
花びらに宿る朝露のように
清々しいことに

あなたの語る言葉がいつも
遠い昔に聴いた音楽のように
懐かしく響くことに

だから
いつまでも覚えてるんだ
生きることは
死を待つことではなく
死に抗うことでもなく
ただ心のままに
在り続けることだって

【冬のオルガン】



西陽射す放課後の第二音楽室
古びたオルガンが
窓際に押しやられ
やがて来る
粗大ゴミの日を待つ

かつてはだれかしら触れていた鍵盤にも
今ではホコリがかぶり
ただポツンと置かれた佇まいは
哀しみを抱いているようにも
満足げに余生を楽しんでいるようにも見える
それはあるいは
私の気持ちの投影かもしれない

時から時へと
あなたはどれだけの生徒をみて
どれだけの笑顔と
どれだけの涙を運んだのか

ただそこに居るだけで
人が集まるのは
あなたの役得かもしれないが
例えばこの放課後みたいに
同じだけの寂しさも
知っているのだろうか？

私はあなたに片思いをしていたから
春を迎えられない
この冬限りのあなたを
見送りたいと思う

ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、
出なくなったはずの
「ラ」
の音が
私の胸の中で
微かに響いた気がした

【レイン】



どんなに忘れようとつとめても
上手くいかない時がある
周りのノイズが
僕や君を
ジワリジワリといたぶり
大切なものにさえ
八つ当たりしたり
自分をダメにするほどに
胸を行き来する
闇と戯れてみたり
形は違えど
僕らは時々悪夢を見るのだ
逃げるな？
落ち着け？
早まるな？
貴殿の言葉が
あの手この手で
いかに僕たちを包囲しようとも
僕らはきっとコタエを見つけますから
あなたはその椅子に座って
くつろいでいて結構ですよ
捨てぜりふだと言われようと
例え明日が世界の終わりだろうと
僕は心に種を蒔き続けるから
だから
いつか読んだ小説がくれた言葉を
呟いて
僕は去るのです
雨に降られたと思えばいい

【フェアウェル】



目の前にあることに一生懸命だったことに
ひとり乾杯
そしてバイバイ

太陽系から離れゆく
宇宙船みたいに
淋しくて
無軌道な心は
いつか再び
抛り所を見つけるのか
それさえわからず
まるで
あのライカ犬の行方を案じるみたいに
僕は他人事のように
自分を見つめている

きっと...
とか
いつか
とか...
願う心も
どこか
あの星に残した忘れ物のよう

ねえ、
虚しさって
宇宙を思うより
果てしないものじゃない？

エピローグ

果てしなく続くストーリー
そのひとかけら、ひとかけらを
退屈だと断じるのは
きっと違う

どんなところでも
どんなことにでも
楽しみや
哀しみはあるはずだから

人生はチョコレートの箱のようなものだという人がいて
人生はチョコレートの箱なんかではないという人もいて

どっちが正しいかなんて
僕は決められないけど

でも
箱の中が空っぽだなんて思いながら生きるより
箱の中にある何かを想像しながら生きる道を
僕は選ぶよ

読んでくれて本当にありがとう。

Listen To My Story

<http://p.booklog.jp/book/88427>

著者 : threelines

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/threelines/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/88427>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/88427>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ